

企画展

神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集3『新作浄るり めをと山賊―食満南北遺稿集―』刊行記念展示
「食満南北が描いた歌舞伎～古典芸能研究センター所蔵資料から～」出品リスト

(2020.4.6～5.28)

○歌舞伎十八番図絵 18軸

1 勸進帳、2 助六、3 暫、4 毛抜、5 鳴神、6 矢の根、7 景清、8 外郎売、9 鎌髭
10 解脱、11 不動、12 関羽、13 象引、14 不破、15 押戻、16 嫩、17 蛇柳、18 七ツ面

『歌舞伎十八番図絵』は、川柳結社「番傘」の同人であった堀口塊人の旧蔵資料。平成二十八(2016)年に塊人の孫の湊薫氏から古典芸能研究センターへ寄贈を受けた。

堀口塊人は南北に私淑した人物で、その夫人との結婚では南北が仲人をしたという(湊薫氏談)。塊人は、戦後に作られた“さつき川柳社”の主幹を、初代主幹坂澄風の没後に受け継いでいる。この“さつき川柳社”の雑誌『川柳さつき』は、晩年の南北がもっとも多く寄稿していた雑誌であった。

『歌舞伎十八番図絵』は堀口家で軸装にし、その際に軸を収蔵する箱を制作した。その箱には大阪の画家藤原せいけんによる以下のような箱書がある。

歌舞伎十八番図絵は南北翁の作品にして塊人在世中箱書きを成すべきを遂に事ならず代筆としてせいけんこれを書す 昭和五十六年二月

軸には、歌舞伎十八番の絵とそれに因んだ川柳が付されている。「古句をかりて」とある「勸進帳」を除くすべてが南北作の川柳である。絵の中の役者には顔が描かれていないが、顔の形に特徴が見いだすことができそうである。また、江戸時代・明治時代の浮世絵を利用しているものも少なからずある。なお、この絵は、昭和三年頃に南北より堀口塊人に譲渡されたいので、モデルがある場合は、描かれているのはその頃までの役者となる。

○勸進帳 3軸

「勸進帳」の義経・弁慶・富樫を一軸ずつに描いた三幅対の軸。

勸進帳聴聞と富樫から言われた弁慶が、白紙の巻物を広げて勸進帳と偽り読み上げる場面が描かれている。巻物を開く弁慶、巻物の中を覗こうとする富樫、笠を深々とかぶり様子を窺う義経という緊迫した場面である。この三幅は絵のみで賛はない。

○めをと山賊^{やまだち} 1冊

志水文庫所蔵の食満南北未発表脚本。

表紙には「新さく浄るり」とあるが、松羽目物風の(おそらく)歌舞伎脚本。上演された形跡はないが、口絵部分に舞台図・登場人物の扮装図が載り、上演を念頭に置いて執筆されたことがうかがえる。

○大阪芸談草稿 7冊

食満南北著『大阪藝談』は、昭和十八年頃に執筆された随筆である。序文に「昭和十八年大阪名物天神祭の日」と記されている。ただしこの日付は消されて、「昭和二十年の考へさせられるある日」と書き直してある。その内容について南北は序文に以下のように書く。

「大阪藝談」それは或時「上方藝談」になるかもしれない。しかし何れにしても、記録の少ない、歌舞伎文楽、落語、春の踊、上方舞、二輪加、等等に涉って識れる程は書き、聞きしほどは記録し、上方の面目を伝えたいと思ふのである。若し万一、それは何になるのだ、と詰問せらるゝむきもあらば、私はたゞちに答えたいと思ふ。大阪を語り、大阪を説き、大阪の芸能の真面目を物語ることによつて、大阪を識つてもらひたいからである。近松、西鶴の昔より、さうした物の本に恵まれてゐない大阪は、たまたま、明治を中心に芸談をこゝろみることも亦無駄ではないかとも思ふ。

「歌舞伎篇」「落語篇」「文楽篇」「大阪俄篇」「春の踊篇」「南北篇」からなる草稿は、全八冊の内、落語篇の桂文左衛門から桂文枝までを記した五冊目を欠く。各冊福助足袋の罫紙にペン書き。表紙に南北による絵が描かれている。